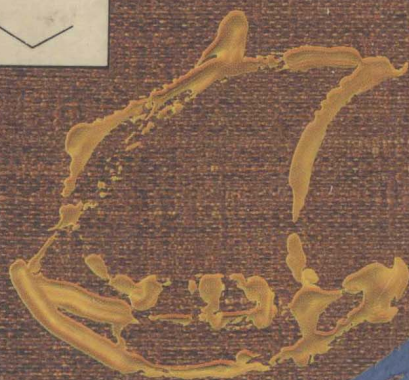


司馬遼太郎

菜の花の沖
〈二〉



馬遼太郎

の花の沖



菜

菜の花の沖一

昭和五十七年六月二十五日 第一刷

定価 千二百円

著者 司馬遼太郎

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 東京 二六五一一二二一

印刷 大日本印刷
製本 大日製本

万一、落丁乱丁の場合はお取り替え致します

目次

兵
庫

176

村
拔
け

136

妻
問
い

98

網
屋
の
お
ふ
さ

64

瓦
船

46

潮
騒

34

都
志
の
浦

7

あ と が き	潮 路	出 船	春 の 海	樽 廻 船	海 へ
338	321	306	273	237	203

装幀
栗屋 充
題字
中田 功

菜の花の沖
一

都志の浦

淡路の島山は、ちぬの海（大阪湾）をゆったりと塞ぐようにして横たわっている。

北にむかうほど長く細く、逆に南へむかえば地がひろく、野がひろがり、水田が空の色を映している。

北端の岩山は感覚として触覚のように鋭い。わずか一里のむこうに本土の車馬の往来するのが見え、そのあいだを明石海峡の急流がながれており、本土に変化があればすぐさま響いてしまう。たとえばこの話の主人公がうまれるすこし前、対岸の斜め東に起伏する六甲山系から海にそぐあたり（いまの芦屋から神戸灘地方）の小さな河川群ぞいに画期的な工業があらわれた。

水車式の搾油業であつた。

それまでの（あるいは遠い地方の）油搾りは菜種の種子をあつめ、搾木を人力でうごかしてしばらくという原始的なもので、生産量もたかが知れていた。

これを水車仕掛にして大いに生産力をあげるという方法を考えたのはたれだったのであらう。

中国では十七世紀に成立した技術書『天工開物』によると、搾油は人力の搾木もあれば鍋で煮

る方法、または臼^{うす}をひいて採る方法もあり、朝鮮では餅をつくように臼に種子を入れて杵^{きね}でたたくという方法であつたらしい。いずれも水車仕掛ではない。

ともかくも、六甲山麓の住吉川、芦屋川などの急流ぞいに水車工場がうまれ、水流を大水車にうけ、軸を工場内に入れ、軸には木製の歯車をつけ、昼夜となく旋回させて搾油しはじめたのである。それまでは菜種油は高価なものであつたが、この大量生産によつてやすくなり、さらにはこの油を諸国にくばるために兵庫や西宮^{さいのみや}あたりの海運業が栄えた。

この要素だけではないにせよ、このころから、兵庫から灘、芦屋、西宮あたりの人口もふえ、瀬戸内海を故郷とする腕^{うで}ききの船乗りもあつまつてきた。

明石海峡をへだてた淡路は、対岸の殷賑^{いんぎん}の照り映えをうけた。対岸で人口がふえるため、淡路ではさかんに瓦^{かわら}を焼いて舟で送った。

また対岸で搾油がさかんになつたために、淡路ではどの農家も、それまで以上に油菜^{あぶらな}（なたね）を植えるようになった。この島は山は丘という程度にひくく、地形による日当たりのさまざまげがすくなかつたから、どういふ場所でもそれを植えることができた。

このため、晩春になつて、あぜ道をゆくひとびとが汗ばむころになると、全島が菜の花の快活な黄でうずまり、その花ごしに浦々の白帆^{かべい}が出入りした。

帆^{かべい}といえば、淡路の国は古来、海人の国でもあつた。

『古事記』に、男女神があらわれて国生みをするという話がその冒頭に出てきて、まずこの島を生むというのが、なにごとかを暗喩^{あんぎゆ}している。さらにはその男神のほうの神社が古くからこの国に所在するごとく、もともとこの島の海人部^{かいじんぶ}（漁撈^{いさなう}族）の神話が大和政権に吸いあげられたものかとおもわれる。

このはなしの主人公は、都志の浦でうまれた。

浦は、淡路島の西海岸にある。

——日本でいえば、山陰地方です。

と、このあたりの人はいう。表ともいいうべき大阪湾方角の海岸線は温暖だが、裏のほうは冬の風がためたく、気温も表より数度ひくく、物成りもどこかわるくて、つまらぬところだというのである。

それだけのことで、

「山陰」

というのは、淡路人のユーモアであらう。

「一体に淡路はつまらぬところですよ」

と淡路人はよくいう。一般に中央から遠い土地のひとびとは自己愛の変形としての郷土愛がよく、ときに激烈でさえあるが、淡路人にはお国自慢の風がない。土地が温暖で、上方に近いという意味で立地条件にめぐまれているために、自分の住む土地を自分でけなすゆとりがあるのかもしれない。

その温暖な国でも、ほんのわずかなちがいで、西海岸はそうではないという。たしかに風景は表にくらべ、どこかあらあらしい。

しかし程度の差にすぎない。

なんといつても、温暖な瀬戸内海の大広間ともいいうべき播磨灘に面しているのである。その海風を正面からうけるといだが、シベリアの北風が日本海をこえて吹いてくる地方からみれば、め

ぐまれすぎているというべきであらう。

浦から沖を見ると、碁石をまいたように家島や西島の群島がみえる。西方には小豆島の山——星ヶ城山だろ——がときに藍色あいいろになったり、ときに曇天下のしみになって霞かすんだりしている。

筆者にとつて私事ながら、少年のころ——昭和九年であつたか——このあたりに修学旅行に行ったことがある。東海岸の洲本すもとに泊まつて西海岸の都志へゆくのに、こんなに島内にくつも横断道路があつてバスでゆくことができるのだが、当時は江戸時代のままのせまい道で、結局は船で島を大まわりしてようやく西海岸にたどりついた。島には乗合船がなく、小さな発動機船に、瓦や石炭をつむぐらしいのような団平船だんぺいせんを曳かせ、その団平船に子供たちをすし詰めにするのである。

都志の浦のすこし南の海浜に、五色の浜というのがある。豆粒ほどの砂礫されきが赤、黄、青などの色をもち、渚なみさはひろびろとして夢のようにうつくしく思われたが、こんにち海触かいしよくのために渚が貧弱になつてゐる。この主人公のころには沖まであでやかに見えるほどだつたであらう。

かれの村の都志には、都志川という幅せまい川が流れている。この川ぞいに水田がひらけ、江戸末期に実測されたこの村付近の地図をながめてみると、青く塗られた水田地帯の中に大小の農家が気ままなちで点在している。浜のほうをみると、漁家が水田農家とはちがい、密集している。海人の国らしく漁家の戸数のほうが多そうであつた。

都志の水田地帯のなかに、長屋門をもつ屋敷がある。この村にはめずらしく苗字を持ち、在所のひとつとも、

「高田サン」

とよんで、なにやら格別な敬意をはらっているが、庄屋のような権力は持っていない。村で婚礼などがあると、高田家の当主はにわかに野良着を紋服に着かえ、大小を帯びて出席する。

江戸期は、格式の時代である。平百姓は藩のゆるしなく欄間らんまを設けることさえできない（献金をすれば別である）。むろん門構えは許されず、まして長屋門をもつことなど平人に許されるわけがないが、高田家はどういうわけか、それを許されている。

高田家の祖は、そのむかし、都志川の上流の鮎原あはらという山中にいたという。それ以前は遠く尾張にいたともいい、越前にいたともいう。ともかくも戦国の中期に淡路にきたらしい。戦国の淡路の島主の安宅氏あたくしに仕えたともいい、あるいは別の説では安宅氏をほろぼした織田氏の家来だったともいう。のち土着し、阿波・淡路が蜂須賀氏の封土になったときに土着の身ながら郷土きよこのよくな礼遇をうけてきた。

高田家の屋敷に、冬も青い葉をもつ大きな樹がある。皮革質のつやのある葉と、象の皮膚のような幹をもっている、一見、モチノキに見える。樹皮を剥いでたたけばトリモチをつくることができる樹である。

ただモチノキの場合、晩秋には珊瑚さんごのように赤い実をつけるが、しかし、この屋敷のその樹は青い実をつける。

「モチノキでもない」

「なんの樹じゃろ」

村の人も首をかしげる。高田家の者も知らない。しかし樹に威厳があり、華やぎがあつて、その点、高田家の奇妙な家格に似ている。

奇妙といえば、高田家の当主は年に何度か、藩の山林を見まわりにゆく。そのときは平素の風

とはちがい、朱塗りの陣笠をかぶり、小者をつれ、大小をたばさみ、いかにもお侍のような容儀で出てゆくのである。あるいは洲本の城主（蜂須賀家の家老稲田家）から在郷のままそういう御役目を言いつかつているのかもしれないが、在所の者は無頓着で、たずねもしない。

村に、

「キツキヤ」

という発音でよばれる百姓の子がいた。

「菊弥」

という幼名をつけられている。のち元服して嘉兵衛と称するのだが、腕白が過ぎて村の大人たちから好かれていなかった。悪童というよりも、この子自身の尺度で相手を悪だと思うと、気が狂ったように殴りつけてしまう。相手が大人であろうと、会釈しなかった。

まだ十一歳というのに、大人の顔をぶらさげている。臉が厚く垂れ、怒ったとき、その臉を幕のようにひきあげると、大の男でもおびえるほどに眼光が鋭かった。

この子が、この高田家の若い当主の律蔵にだけはなついていた。

「本家」

と、律蔵の高田家のことをキツキヤの家ではよんでいる。

キツキヤの家は、貧しかった。

かれの祖父が高田本家から出て村内で分家をし、医者を開業したが、どれほどの腕だったかわからない。子がなく、またしても高田本家から養子をもらった。キツキヤの父弥吉である。

弥吉はわずかな田畑を継いで百姓をしたが、体が弱く、寝つくことが多かった。

その上、家族が多く、暮らしのために田畑をすこしずつ売って食いつないだ。

弥吉には田畑を売って何をするという才覚などなく、ただ食い代に充てるために田畑を売るのである。たちまち貧窮し、キッキヤのこの時期には屋敷地の過半も売ってしまい、住まいは九坪ほどになった。

貧のきわみと云っていい。

「とてものこと」

というのが、弥吉のくせであった。

「とてものこと」

つぎは言わない。ただ首をしずかに振るのみであった。

自分のような者にはこの世はとも切り凌げないというなげきであつたらうか。ただ弥吉のかしきは、子だけは沢山作つたことである。キッキヤを頭に六人の男の子が生まれた。

村内に、小出さんという医師がいる。

——小出さんへゆく。

と、村の子供がいえば患者としてではなく、読み書きと算用をならいにゆくのである。この時代の村医というのはほぼ奉仕のようなもので、たいていは副業をもっていた。小出さんの場合、寺子屋を兼ねていた。

キッキヤも八つから小出さんに通っていたが、十一歳になったこの年、家計がそれを許さなくなつた。

「小出さんをやめるのか」

高田本家の若い当主の律蔵は、やってきた少年から決意をきいておどろいた。

律蔵という若者は、色白の市松人形のような貌かおをしている。

——律蔵さんは前世に欲という荷物を置き忘れてきたらしい。

と、村のひとびとから言われていた。学問もとりたてて好きでなく、農事に精を出すほうでもないが、仏いいようというのか、ひとの境涯を自分のことのように同情してしまう。といって何をしてやるということもないのである。

また他人に対し、身分、貧富、賢愚、老若などという等級をつけて見ることをしない。このことは美徳という以上に、感覚として欠けているといつてよく、ときにかれを奇人に見せた。たとえばまだ十一歳でしかないキツキヤに対し、かれはいつも一人前としてあつかい、精一杯の真剣さで話してきた。

このことは、村中からつまはじきされているキツキヤにとって沁しみ入るようにうれしく、律蔵にだけは子供ながら腹の底から物を言ってきたつもりだった。もともと大人顔の悪童だけに、律蔵としたり顔で話をしているキツキヤの様子は、第三者からみればおかしかったにちがいない。

「わしは、この身を売ろうと思うのじゃ」
キツキヤがいうのである。

「身を売るのかや」

仏いいようの律蔵は、目の前の従弟いとこの不幸にぼう然としてしまった。といつて分家の困窮を救済する力は、律蔵の本来にはなく、どうしてやることもできない。

「身を売ることばかりは、やめたがええぞ」

火を揉み消すような気ぜわしさでいった。